

「徳不孤、必有隣」

1. 「徳」って何だろう

右掲は大阪府神社庁が毎月発行している「札」の11月分です。「徳不孤、必有隣」という「論語」を載せています。解説には「徳のある人は、必ず理解者・協力者がいる。」とあります。確かに人徳高い人には理解者・協力者がいます。辞書では「人間の持つ気質や能力に、社会性や道徳性が発揮されたものである。徳は卓越性、有能性で、それを所持する人がそのことによって特記されるものである。人間に備わって初めて、徳は善き特質となる。人間にとって徳とは均整のとれた精神の在り方を指すものである。これは天分、社会的経験や道徳的訓練によって獲得し、善き人間の特質となる。徳を備えた人間は他の人間からの信頼や尊敬を獲得しながら、人間関係の構築や組織の運営を進めることができる。徳は人間性を構成する多様な精神要素から成り立っており、気品、意志、温情、理性、忠誠、勇気、名誉、誠実、自信、謙虚、健康、楽天主義などが個々の徳目と位置付けることができる」とあります。

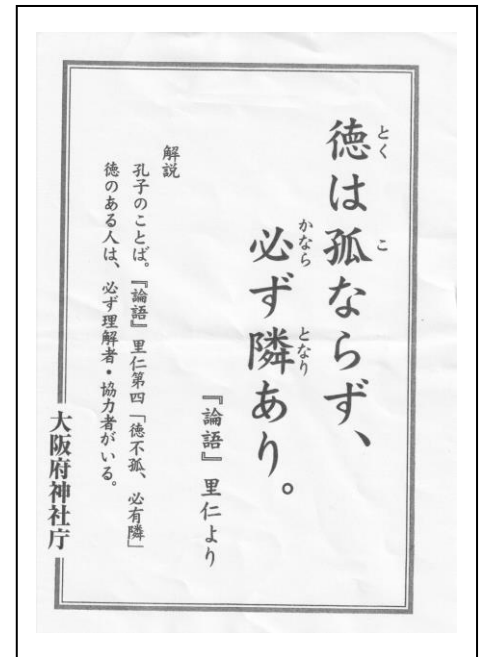
私自身は「徳」を考える際に思い浮かべるのが相田みつをさんが「めぐりあい」に「あなたにあえてほんとはよかった」と一人でも言って欲しいと書いておられ事です。でも、他人の心は分からないし、変える事もできないのです。「徳」を積みと言われても漠然としています、自分の出来る事で善いと思う事を行い「感謝」され「また、会いたい」と思ってもらえるようになれば良いなと思っています。

2. 「善」って何だろう

「善行を積む」というのも難しい事です。「善魔」という言葉があり遠藤周作さんは「自分の考えだけが何時も正しいと信じている者、自分の思想や行動が決して間違っていないと信じている者、そしてそのために周りへの影響や迷惑に気づかぬ者、そのために他人を不幸にしているのに一向に無頓着な者——それを善魔という。」と定義されています。よく「正義のつもり」とか「良かれって思って」行うことがうまく行かない事があります。中には「押し付ける」方もいらっしゃいますが、はた迷惑な方です。

そもそも「善行」って何かと考えると辞書では「よいおこない。道徳にかなったおこない。」とあります。しかし、「良い行い」は環境によっても変わって来ます。例えば、戦争の最中に敵と対峙して行う「善行」は敵を退治する事なので客観的に「殺人」なのです。また、「トロッコ問題」がありますが「あなたがスイッチを押すと、5人は助かるけど無関係の1人が犠牲に。しかし、押さなければ、5人が亡くなる」という問題のポイントは「無関係の1人」にあります。助かる人数が論理的には正しいかも知れないが倫理的には疑問が残るのです。

今、各地で戦争があり、一般市民が巻き添えに遭っています。攻める側はその中に敵が混じっているからだと言われ、攻撃を受けた側は一般市民を巻き添えにしたと被害を叫びます。つまり、2つのサイドがあるのです。戦争を終わらせることが「善」とすれば、第二次大戦のように広島・長崎に原爆を投下して一般市民を巻き込んでも戦争を終わらせた米軍も投下した兵士は重い罪意識に悩まされたと言います。今の戦争はインターネットが武器になり無人のドローンで位置を特定してミサイルを誘導するのでゲーム感覚と言われています。しかし、原爆のような大量殺人兵器などを使用する事は避難されますが、戦争が長引けば一般市民の巻き添えが増え続けるのです。



3. ザイアンスの法則

今回は「徳不孤、必有隣」の言葉から「徳」そして「善」について書いています。「人徳」と「善人」では少しイメージの差があります。「善人」は行いが正しい方ですが、「人徳」にはその上に人望が厚いが加わり、それによって人が集まってくるイメージがあります。この点で見るとよく「社長と一般社員の間に平行線がある」と言いますが、社外で顔広く人望の厚い方でも社員との間に距離感があるのです。主な原因は本音で話す事が難しい事があります。なぜなら、立場の差があるので社員の方から反論が難しいのです。何を聞いても「そうですね」というYesマン的な相槌が返ってくるので本音で話しかけることを避けるのです。

この距離感を埋めるのが日頃の雑談力です。右掲は有名な「ザイアンスの法則」ですが、人間関係の本質を突いています。社長は孤独という方もいらっしゃいますが、社員との会話回数を多くして、社員から「困りごと」の相談が増えたという方がいらっしゃいます。特に「人間的な側面」が重要で、例えば、趣味が同じなら会話が弾むこともあるのです。従って、社長は社員の趣味や家族構成などをよく知っておく必要があります。個人的な話ですが、故福井社長から「炭屋のおやじは元気か」とか故十河専務からは「賢いお母さんはどうしている」という風にパーソナルな問いかけをもらいました。「自分の事を知ってもらっている」という「人間的な側面」を知る訳です。まさに「雑談力」の真骨頂と思っています。

ザイアンスの法則

1. 人は、会えば会うほど好意を持つ
2. 人は、相手の人間的側面を知った時に好意を持つ
3. 人は、知らない人には、攻撃的、批判的、冷淡に対応する

4. 「縁・運・つき」で「徳」を磨く

「徳を磨く」と言いますが、誰もが「善行」や「徳行」を重ねるようにされていると思いますが、それが「善魔」になったりするので相手との関係を重視する必要があります。ある方は「金」の力を借りて振る舞うことで自分の存在を確認されていますが、確かに「いい人」と思って貰えるかも知れませんが多くはその場限りに終わってしまいます。「振る舞い」がないと「いい人」ではなくなってしまう。経営者の方で「振る舞い」型の方は散財しないように注意する必要があります。確かに、金持ちのところには人が集まるのですが、それは「金」が目当てなので真の意味で「徳」とは言えない部分があります。しかし、何事も「縁・運・つき」なので人と出会う「縁」が重要です。従って、「寄って来る者拒まず」で持ってきた情報の中から自分の「運」を切り拓く方もいらっしゃいますので否定するものでもありません。

私自身は「徳不孤、必有隣」を実感したケースが今までに何度か体験しています。例えば、経営コンサルタントとして開業した際に、サラリーマン時代の友人から「PL法のセミナーを手伝わないか」と誘いを受け、その参加者のフォローを若い人と行ない名刺交換できた方々に「AMIブレティン」を郵送している中から第一号のお客様が誕生したのです。この時、初めての経験なので船井総研の方が見積もりの仕方を教えて下さったのも大きな助力になっていました。また、同じくサラリーマン時代の知り合いから声をかけて頂きコンサル契約が結べた事もありました。そういう意味では「徳不孤」は「困った時」であり「必有隣」は「助け舟」とも換言できるかと思います。その筆頭は故福井社長で「コンピュータをやりたい」という願いを叶えて下さり「IBMの方が榎野君の為になる」と言って高いけど自分でソフトをつくる方を選んで下さったのです。そのお陰で自動車販売会社の全システムの開発を担当し、さらに開発の端境期に外部のソフト開発をさせていただき、僅か3年間でしたが、自社では経験できない生産管理や異機種間通信などにチャレンジし、いわゆる「一生折れない自信」を得たのです。確かに、何かで特筆する技能などを持っている方が「助け舟」になると実感しています。その意味でベースは自身の価値を高める事が重要になり、それプラス「人脈」の力と思い「縁・運・つき」を重要に思っています。

【AMIニュースのバックログは <http://www.web-ami.com/siryo.html> にあります！】